平成２５年白老町議会総務文教常任委員会会議録

平成２５年１０月１５日（火曜日）

開　　会　　午前１０時００分

閉　　会　　午前１２時１４分

○会議に付した事件

所管事務調査

１．白老町小学校適正配置計画（案）について

・自由討論

・委員会報告のまとめ

○出席議員（６名）

委員長　小西秀延君	副委員長　山田和子君
委　員　吉田和子君	委　員　斎藤征信君
委　員　本間広朗君	委　員　前田博之君

○欠席議員（なし）

○職務のため出席した事務局職員

事務局長　　岡村幸男君

主　　査　　本間弘樹君

◎開会の宣告

○委員長（小西秀延君）　ただいまより総務文教常任委員会を開会いたします。

（午前１０時００分）

○委員長（小西秀延君）　本日の調査事項は白老町小学校適正配置計画（案）についてでございます。本日は適正配置計画（案）に対する委員間の自由討議を経て委員会報告のまとめという形で進めたいと思っております。どうぞよろしくお願いいたします。

それでは調査事項の１番、適正配置計画（案）に対する自由討議を始めたいと思います。ご意見をお持ちの委員の方はどうぞ。前田委員。

○委員（前田博之君）　私10日休んで教育委員会との話の流れがちょっとわからないので、その中で言うのも失礼ですが確認だけしたいのですけども、ＰＴＡと役員の方と議会が懇談したときには教育委員会の応諾書が先で条件整備が後だといったのですけど、10日のときの教育委員会の話ではやはり条件をいろいろアンケートにも出ていますが、整備してから応諾書ではなくて、先に応諾書もらってから整備するというような考えでいいのでしょうか、そういうことで10日はどうだったでしょうか。それによってちょっと話の進め方違うのかなと。どうですか、委員長。

○委員長（小西秀延君）　説明があった中では基本的にはそのように進めるというふうに理解をしております。前回もらったと資料にもございましたがそのように説明をされ、今主に的条件、通学に関する条件が大変多かったように記憶をしておりますが、これも計画書に載っているとおり指導員等をつけて、その通学道の歩道橋等が完成するまでは対応をしたいと。それでご了承をしていただきたいというふうにＰＴＡの保護者、地域の方には伝えているという説明がございました。大ざっぱにはこのように私も理解しておりますが、局長何かつけたすところがあればお願いします。岡村局長。

○事務局長（岡村幸男君）　教育委員会の説明は応諾書の関係なのですけども基本的には４点を合意として、応諾書のほうには載せいたという考え方です。要件は１つ目としまして緑小を活用するということです。登校の年次は27年度。社台小はスクールバスを利用。統合に同意するということです。この４点を応諾書では基本合意とするという考え方です。今言われました個々のＰＴＡから出されている懸念されている課題だとかそういうことについては、その応諾をした後に準備委員会の中でそれらをきちんと検討していくと、こういう説明がなされております。以上です。

○委員長（小西秀延君）　前田委員。

○委員（前田博之君）　申し訳ないのですけども前回の委員会やったときに統合のための条件で校舎、歩道橋等々合わせて２億何ぼぐらいになるよとこうなっていましたけども、先般健全化プランと出ましたけど、これ局長に聞いたほうがいいのか。10日に出たのかどうかわかりませんけども健全化プランに係る経費というものは保留財源として、あるいは今後の財政運営する中でこの額は確保されているのかどうかということが10日に確認されているのかどうか。振り返って申しわけないのだけどもこの辺がどうなのか、ということは条件提示しても今財政厳しいですから、本当に条件

整備して、これはできるできないということ整理して、ＰＴＡの役員と整理していかないと大ざっぱに話して、あと予算ないからできないということになったら非常に不信感を招くだけですので、その辺はどうなっているのかなと思うのですけども、もし10日出ていたらまたぶり返して申しわけないのだけども、やはり議会としても委員会としても整理しておく必要があるのかなと思うのですけど、その辺はいかがでしょうか。

○委員長（小西秀延君）　岡村局長。

○事務局長（岡村幸男君）　前回の説明の中で質問として出ておりまして、それにつきましては教育委員会の答えとしては概算で約２億7,900万ということ。これは今回の財政改革ののプランの中には盛り込んでいると。ただこれはあくまでもこの校舎の改修ということ。歩道橋についてはこれには入っていないということでございます。

○委員長（小西秀延君）　今委員に確認したところ、バスも入っていないのではないかということでございます。今回３校、社台、白小、緑小のＰＴＡ役員の方たちにも参考人として承知をかけましてご意見をいただきました。３校の中でもまたわれるような話もありまして、町民の思いも今回いろいろ複雑な形になっております。ただそれを大きくやはりまとめて委員会の考え方はある一定の程度まとめて報告しなければならないということも所管事務調査をやればそういう形になってございますので、率直なご意見としていただければ大変ありがたいです。前田委員。

○委員（前田博之君）　白小、緑小の統合は平成10年からやっていますからこれはもう私も手がけていから反対する何ものもないと思います。ただ条件整備が先にするのか応諾書が先かという議論がありますけども、ただ社台小学校ですよね。これは非常にどうなのかなと。私も現場の人方とか他校の先生方に聞くと、統合するのなら３校するのなら一斉にしたほうがいいのではないかと。後から入ってくると、いろいろ問題があるのではないかという話があるのです、そういう経験者等から聞くと。ということはそれによって途中からくると６年生まであるから、いじめとかぎくしゃくすることがあるよと。やるのであれば仮に条件が合えば多少遅れても一斉にやったほうがいいのでないかというような声も聞いているのですよ。その辺どうかなと皆さんで議論したほうがどうかなと思うのです。私は地域に小学校、学校が１校残すべきだと私は思っていますので、それはあくまでも地域の住民を優先して地域の住民の人が統合してくださいというまでは、ある程度地域の声を優先すべきだなと私思っているのですけども、だけどいろいろ聞くと今白小、緑小統合先に先行して、社台小が後から入ってくると、そういう前段言ったような問題もあるよと、こういっていますので私もちょっと考えているところなのですけども。その辺皆さんいかがでしょうか。

○委員長（小西秀延君）　吉田委員。

○委員（吉田和子君）　私は小学校の緑小と白小の統合というのは耐震化、それから白小学校の老朽化。そういったことを考えてこの２校は早く統合べきというふうにずっと考えていました。今回の適正配置の案を出されたときに社台が入っているということで、反対に私は小学校というのは各地域に１校が望ましいというのは私もずっとそういう考えでいましたので、社台の小学校がなくなるということは校舎の関係でいけば問題はない。ただ複式ということが問題でメリット、デメリットが出ていましたけれども、できるなら私は社台に残してもらいたいなという思いはあります。と

いうのは保育所のなくなりましたし本当に社台の地域を考えたときには大変厳しい状況になるのだなというふうに思っていました。今回ちょっと確認しなかったのですが、あくまでも教育委員会はこの適正配置は３校一緒ということだと考えていると思うのです。社台が抜けて２校だけでやるのかということがちょっと確認しなかったなと後で思っていたのですけど、ただ社会小学校のＰＴＡは後から入ることはしたくないと、そういうことははっきり言っていましたので、そうであれば本当に将来的なことを考えて私は社台小学校がへき地校みたいにして、また違った形の学校運営ができるならいいけど、ちょっとそういうことはわからないので、前田委員に聞いたらそれは無理なことなのだよという話なので、もしへき地校にならないのであれば、将来的なことを考えたときには３校に一緒にならざるを得ないのかなというふうに思っているのです。ただ社台にとってはふって沸いたような話だと思うのです。白小と緑小が覚悟していたことだと思うのですけど。だから27年となると厳しいのだろうなと。ただ白小のことを考えると私は27年がいいのかなというふうに思っていますのでそれに社台をどうするか。この委員会でこうすべきああすべきとなかなか出せないとちょっと思ったのです。これから各学校臨時総会を開いて結果をそれぞれ持って応諾書に応じるわけですよね。だから社台だけ後というわけにはいかないのだなと思ったら、では一緒にやっていただくより方法ないのかなというふうにはちょっと考えを変えつつあるのですけど。苦渋の選択をしなければならないというふうに思っています。

○委員長（小西秀延君）　ほかの委員の方。本間委員。

○委員（本間広朗君）　まとめ後なので私も簡単にちょっと。私も実は小学校、各地域に１校あったほうがいいという考えで、それで先ほどちょっと前田委員のお話ししていたのですが、地域というかＰＴＡというか親御さんのお話聞きながら、そういう統合してはどうかというところを持ちかけるような、そういうことを中学校のときも前回僕そういうようなこといって、何か町のほうはもうやるぞと決めたら当然やりますよね、一方的にやるといったらあれですけど。なかなかそういう聞いてくれない、お話を聞いてくれないというところがあるのですよ。それはいいのですけど今回社台小なのですけど、僕も会議ありましたよね10月９日に社台小ＰＴＡ。その中でどういうような協議をなされたのかっていうのはちょっと内容までは詳しくはできません。その中で本来応諾書に関してもいろいろ本当は協議されて、ある程度結論出さないと11月中旬に応諾書の予定ですので、もうある程度結論は出ていると思いますのでその辺のところ今後しっかりいろんな条件を聞いて社台小の条件を聞いて進めていかないといけないのかなとちょっと思っています。後でまとめのときにお話しますので、このくらいでいいです。

○委員長（小西秀延君）　ほか、ご意見をお持ちの委員の方。山田副委員長。

○副委員長（山田和子君）　山田です。私も以前までは各地域に小学校というのは１校あって、子供が徒歩で通えるような環境というのが望ましいというふうに思っておりました。しかしノーベル賞を受賞された鈴木先生のお話の中でいろんな人と議論することが子供たちを成長させということ。どうしてノーベル賞を取られたのですかという質問で子供のときはどうだったのですかというような質問の中で、そういう発言をされいてたのをきっかけに、多くの経験をさせることによって子供が成長していくのだなということをそこで確信したというか、考え方が変わっていきましたの

で大人としてそういう環境を整えてあげるということは大事なことなのだなというふうに思い始めました。ですので多くの子供の中でスポーツ１つとってもそうだと思うのですけども、さまざまな集団の生活もできますので統合するということはいつ統合をしても必ずしたくないという人もいるし、このままでいいという意見は必ずどの時期にやっても出てくると思うので、今回は白小の老朽化のこともありますしそういったさまざまな観点からも統合を急ぐべきと私は思っておりますので。ただ要件の中に平成27年度４月１日というところを伸ばすかもしれないというようなご発言もありましたので、その準備委員会の中でお互いの気持ちが固まるまで話し合いを進めながら、統合の年月日というのは伸びる可能性も含まれていますので３地域が協議することによってそれはまた伸びていくことはありではないかなというふうに思っています。

○委員長（小西秀延君）　おのおの出ました。途中から参加になってしまいましたが、斎藤委員ご意見があればお願いします。斎藤委員。

○委員（斎藤征信君）　先ほど話途中から聞いておりまして、施行するのは行政のほうですから、ですからここでああしなさいこうしなさいと我々が指図することではないだろうという。条件がどうなのかということをきちんと話すことが大事であって指摘するものはきちんとした上で教育委員会がどう判断するかと、そのことが重要なことだろうなというふうに思います。それでちょっと思いつくままに話をしますと基本的な部分で私がひっかかるのは複式学級解消。そして多人数の学年複数のクラスをつくるのだというこの大きな２大目標、そのこと自体に私は疑問を持っているのです。複式は確かに苦労があります。だけども苦労があるからなるべくなら複式はないほうがいいだろうというふうに思うのですが、今の子供の減り方の状況からいってこれはいつまでそれが耐えられるのかという問題。そして今白小と緑小、大きな人数のいるところを合併させてあと小さいところ。そうするとどんどんどんどん小さくなってしまうのですよね。そうするとちょっと調べてみたら萩小と竹小と虎杖小と合わせても２クラスをならないのです。ということから考えるといずれこの目標だけからいうと全部統合してしまって学校を１つにしなければならなくなってしまうと、それでいいのかという問題が出てくると思うのです。そういうことから考えて本当私は今人数を大きくしていい環境をつくってやろうというのは、これはかなり以前の話であって大人数のときの話であって、これからは小人数の子供たちをどういうふうにいかしていくかということを考えなければならないのではないかということが、今までの議論の中でよくわかるのではないかなというふうに思っています。それからもう１つは、先ほどもちょっとただで話をしていましたけども学校というのは各地域に１つずつあるのが望ましい。中学校がなくなり小学校がなくなってしまったときの住民の思いというのは、まちづくりへの思いというのはちょっとやっぱりつらいものがあるだろうと。本当にどんなに小さくなっても、もう住民が万歳してしまうまではそこに置いておくべきものが基本だろうと。学校というのはそういうものではないかなというふうに見ているものですから。この見直しはあれが17、18年ですか各地に１つずつ見直すといったのが。あれだってみんなで論議して決めたこではないでしょう。いつの間にあれ出てきたのですよね。前にはそのこといってなかったはずなのです。行政が苦しくなって出てきたのです。ということからいっても、本当にこれでいいのだろうかという思いというのはものすごく思っているということ。３つ目は議論が今までの

あれで煮詰まっていないのではないかということ。みんなが戸惑っている。そして資料が不足している。何で急にやるのだといういうな何かそういう話がいっぱいあってできて住民の話が煮詰まっていないという感じがすごくあるわけですね。ですからこれはどうなのですか、もう少し話し合って後に禍根を残さないようにすることが必要じゃないかなということ。４つ目に白小の状況はどうなのだということをいわれたら、もう我々論議のしようがないという。白小ＰＴＡがいった、ぜひ見てきてくださいと。もうあそこは教育的な環境ではありませんといった、それを我々が放棄するわけにはいかないですよ。本当の責任というのは今まで放置しておいたあれは、ここ２、３年で起きたことではなくてもう何十年もそうなっているわけですから、それを放棄してきたところに責任があるわけなのですけども。だけどこれをどうしたらいいのかといわれたら私も結論が出てこないです。白小の子供たちのために何とかしてあげなさいというしかないのですが、ただ最後に決めるのは住民だと思うのです。最後に住民が統合すべきだということで統合するのが基本ではないかなと。それに行政が合わせていくということが大事かなというふうに思うのだけども、では今いそいでいるのは誰なのだという話になりますね。病院とはまた違うのではないかと。病院が残るか残らないかというのは財政的に、町がつぶれるかどうかなってしまいますのでこの話とはまた違うと思うので。そうなるともう少し時間をかけてやってもこの財政的には何も無理はかからないわけだから。だからもう少し時間かけてやるべきかなという気はします、と私は今思っています。

○委員長（小西秀延君）　各委員から自由討議ということでご意見をいただきましたが、私もまとまりのない話になってしまうかもしれませんが、委員長の立場というよりはここでは個人的な立場で意見を述べさせていただきたいと思います。今皆さんおっしゃられたとおり今回の統合、日本全国的に見てもこの少子化を考えれば学校の数が減るというのは、これはもう必然的な流れかなというふうに私は考えております。ただその中で白老という町の状況を判断していくということは必ず必要なことであり、今回教育委員会が出された案が出てきたのかなというふうに理解をしております。その中で今１番早急に時間をかけずに考えなければいけないことは、白老小学校の状況ではないかなというふうに私は感じております。教育環境は大人が整えてやるべきだと。子供の努力や父兄の努力である程度のことはできると思います。私も白老小学校のＰＴＡ会長をさせていただいているときには、何とか環境をよくしようということでＰＴＡだけで遊具や廊下やいろんなところを修繕もしてまいりました。ただ現状を見ているともうそのような形での小手先の修繕費といいますか、小さな修繕ではもう追いつかないところにきておるのも事実でございます。そこの環境を考えてやるのが大人の仕事ではないかなというふうにまずは思っております。その上でこの統合をどう判断していくか、いろんな統合に向けてのメリット、デメリットまた複式学級のあり方やクラスがえの考えも考えれば、なるべく私は早い時期に統合をするべきであろうと。それが教育環境整える１番近道ではないかなと思っております。ただこれにはいろんな感情も入ってくると思います。社台小ではＰＴＡの方たち約半数があまりこの統合には時期総称ではないかと。思いきりの反対ではないと思いますがもう少し時間をいただきたいというご意見であるというふうにも聞いております。各地域に１校小学校が必要であるという14年度された答申。それから17年にはそれをまた覆すまた答申が行われておりますが、これは大人の世界でいろいろ議論を生んできたことだと思いま

す。その結果も踏まえて、なおかつ社台小学校の人たちもその経緯を知っていると思いますが、もう少し時間をほしいといっているのには時間をかけてあげたいなと思いますが、先に緑小と白小学校が統合し後からというのは私たちも望ましい形ではないということになれば３校１校の一緒の統合が望ましい形なのだろうなというのは見えてきていると思っております。それでここはどの程度あと３校一緒で時間がかかるのかというところが結論なのかなというふうに私は認識しておりますので、合意がなされる期間、27年度というのはベストの形かなと思いますが合意がなされなければこれはどうしようもないことでございますので、27年度を目指し遅れる可能性もあるかもしれませんが、なるべく早い学校環境の整備を整える、そして子供たちの教育環境でクラスがえもできて複式学級を解消してあげる、これが大人の責任かなと考えております。以上でございい。前田委員。

○委員（前田博之君）　委員長の意見それは別として斎藤委員のほうの話に戻って。ずっと今社台小学校が急浮上して統合するよということになったときデメリットとして複式学級を否定しているのです。どうもその辺が私はちょっと教育の観点から委員会で議論をしておくべきだと思うのです。そして本間委員いいましたけど竹浦、虎杖浜、保育園から小学校へ入っていくと同じ人と。小学校から中学校へ行くと。みんな同じだよと変わらない。いろんな話の中で保育園、小学校終わるまではこれは同じ地域中で育ってきてきているしいいのではないかと。ただ中学校になったときはある程度そのままた３年間いくのであれば、多少大きな学校の中で大人数の中で部活とか成長、社会性を身につける。だから中学校は必要でないかというようなのは議論も地域にはあったのです。そういう観点からいくと本来本当に合理的というのか大人数がいいというのだけど、地域性とか腹式学級を否定していいのかということがどうのかと思うのですけど、どうですか経験者として。私はその辺複式学級やっていた先生方と校長先生に聞いたら全部否定しないのです。悪いですけどそこにいる人は否定しないのだけど終わって苫小牧の大きい学校へ行っても、社台の小学校で校長や教頭した方が社台がだめだとか自分がいた学校のことだからあまり極端な言い方しないのだけど、聞くと社台小学校牧歌的で小さい中で非常にいいよという部分も多いのだけど、今ここにいる教育委員会が言うには複式学級だめだということを頭から否定することは、古俣教育長が教育の現場だったのだから、どういう見方でこういう出てきたのかわからないのだけども、その辺どうなのですか。

○委員長（小西秀延君）　斎藤委員。

○委員（斎藤征信君）　答弁するわけではないですが、私の感じ方考え方で確かに大きければそれなりのいろんな成長する条件が変わったものが出てきて鍛えられる、切磋琢磨できるというそのことはどの世界でも同じことなのです。ではその逆にそれだけいったら、そうでなかったら人間育たないのかと、小さいところではだめなのかという。人間いつまでも小さいところでこじんまりとひっそり生活するものではないわけですよ。いずれ広い世界に飛び出していかなければならない。そのときに飛び出していったときに戸惑いは確かにあるかもしれないけども小さいところにいたからその人がみんなだめになっていくかとそうではないですよ。そこから大きい世界に広がったときにぐんとまた別な力を発揮するのですよ。そういうことからいうと、いつまでも小学校のうちから大人数でなければだめなのだという論議というのは成り立たないのですよ。小さければその環境に

合わせて、小さければ小さいところでどんなふうに育てるかと、そこは人間の愛があれば周りの愛があれば育つのですよ。そしてその環境に合わせて広がったときに条件の中で生きていくすべを掴むのですよ。と考えれば大きいほうがいいのだとなったら、では今の論議をしていくと竹浦小や虎杖小の子供たちどうするのか。あれだって小さいところで、萩野だって１クラスなってしまったのです。萩野小学校1クラスだから、交流が少ないからだめだなんていうことをいったら、もうそれでおしまいなのではないか。中学校になった場合に確かにクラブ活動だとかいろんな形で通学する体力も出てくるのだから、だから中学校が大きくなってそれでも１つにまとまるのではなくて、全町に２つ置いて２つでこの競争し合いながらお互いに育つという、そういうルールというのはなければならないのです。小学校は先生方も交えて一緒になっていろんなことができるのです。だから、小学校のうちに急がなければならないという、その論議というのは間違いだと思うのです。間違いという言葉が悪ければそうでも生きていけるということなのです。成長がとまるのではないのです。ということで中学校の合併これは体力的にもやってしかるべきだと思うけども今の状況の中で。小学校まではやはり地域の皆さんの中で育つべきだと私はそう思います。

○委員長（小西秀延君）　山田副委員長。

○副委員長（山田和子君）　斎藤委員のおっしゃることも十分な理解しているつもりなのですけれども、周りに学校がなくてその小人数で育つ場合と、統合すれば多少の人数のところに行けて、私１番のメリットはスポーツができるということだと思うのです。スポーツを通して人間というのはものすごくいろんなことを学べるのではないかなと思っているのです。だから一人二人では卓球はできるけどバレーボールはできないです。サッカーもできないし野球もできない。だけどちょっと人数が多いところになったら紅白試合もできるし、その中で人間関係コミュニケーションを養うスポーツというのは最高の場になるのではないかなというふうに思っているのです。だから大人として先ほど委員長もおっしゃっていましたけど、大人としてそういう子供にさまざまな体験をさせられる環境をつくれるのであれば、つくってあげるべきではないかなと思っています。

○委員長（小西秀延君）　前田委員。

○委員（前田博之君）　僕はスポーツ否定しませんけどスポーツが全てかと。スポーツというのは今国が指導して地域に子供がいなくなるからチャレンジみたいなそういう形で地域のスポーツ少年団的なものを１つの団体として地域で考えるべき。それはそういう道があるから僕は学校単位で考えるべきでもあるけども、地域で考えるべきだと思います、そういうスポーツというのは。中学校ではよく指導要綱の中で部活になっていれば別ですけど。その前僕はなぜ小学校は小さくても地域になければいけないかということは、ほかの道くさ理論という考えなのです。それは学校から家まで通学するときにいろいろなたんぽぽを見る、虫を見る子供たちと悪さをする。それが僕は大きな成長の糧になると思います。先言ったように中学は別ですよ。それともう一つはこれ仮に１学年３学級とか２学級、３学級くらいまであると今発表会でも非常に発表する機会が少なくなってくるのですよ。小さい学校であればそういう創造性を生かした発表会ができるという部分たくさんあるのですよ。それと１つの経験聞いているが斎藤委員もそういう経験したかどうかわからないですけども、仮に社会の時間、子供たちときょうは自然に触れましょう。魚釣りに行きましょうと。その先

生はその学校で代々伝わってきているのは、プールつくりましたよ、魚いますよ。その魚は磁石がついている魚。その先生にもよります。その先生はそれをやめたのです。そして学校の近くに当然校長の許可をもらうのだけど行って魚を釣りましょう。自然を体験してくる。これは小さなある程度の規模の学校ではできないのですよ。僕はどう選択するかということ非常に大事だと思うのですよ。そういう観点からここに書いている複式学級をどうだということに対する考え方をもっと説得力があってもいいのかなと私は思っているのです。機械的に本当にやっていいのかどうかなと。それと先程委員長も話した早目というけど、社台小学校は統合してもいいけども時期については３校同時に統合してくださいと。だけど時期については地域が理解するまで待ってほしいとこういっている。だから３校は同時に統合すべきだと思います。だけどもあとは白小、緑小について教育委員会に統合に対する不信感がありますよと。教育委員会の熱意が伝わっていないといっているのです。ですから僕は統合の応諾書を優先ではなくて、そういうここにアンケートの条件出ていますけど、十分にそれらくみ取って不信感がなくなったうえで３校統合すべきだと。だから僕はその27年教育委員会、なぜ27年と出して明確に時期を出していることが僕も相手に対して失礼だと思うけど、十分に議論をしてお互いに納得した上で、社台もいっていますけど３校同時に統合されたらいいのかなと私は思います。だから27年にこだわるべきではないと思います。

○委員長（小西秀延君）　斎藤委員。

○委員（斎藤征信君）　小規模校の指導のあり方なのですけど、今言われた小規模校ならではしかできない指導というのは確かにあるのです。先生の工夫によってはいろんな体験が、規模の大きな学校に比べると全く別な人間的な触れ合いの中でできるものというのがいっぱいある。その地域でその子供たちを生かす環境というのはいろいろあるのです。それをどう活かすか。それからもう１つは体育関係なんかでも、自分の学校でできるものできないもの制限されるのは当たり前なのだけども、それをどうやって隣の学校と対抗試合だとか合わさってチームもつくって大規模校のところに調整にいくだとか、それを生かすそういう小さな部分をより別な意味で生かしていくという、そういう指導の仕方というのも今まで複式校の中にはたくさんあるのです。ですからそういう指導のあり方私は１番先にといったのは、そういうあり方や何かこれからももっともっと積極的に考えていいくべきでではないかと。複数学級をつくるのだという観点ではなくて、どうやって小さな子供たちを育てていくことが１番望ましいのかという、そういう研究があまりにも少ないのではないのか。減少面でデメリットの部分がばんと出てきてしまって、そういうところのメリットの部分、どう生かしていくかという、そういう基本的なものもあるともっともっと積み上げるべきではないか。そのためには私は大きくなったとしても今40人学級でしょ。今や25人学級が世界的な流れで20人学級というふうにしても構わないくらい先生の目が行き届く20人学級にしなさいというのがこの世界的な流れですよね。そうするとだから先ほど話しましたけども萩小、竹浦、虎杖を３つ合わせても30何人かになるのです合わせて1クラスが。そうすると２クラスになり得ないのです。今の40人学級が邪魔するのです。そうすると目が行き届かない、それでいいのかいと。ただ多くなったからいいのかいという問題につながってしまう。そういうことからいうと私も最終結論は本当に白小の子供を何とかする方向考えなさいよといいたいのです。これから何年か間を開けるのだったら

プレハブでも何でもいいからつくって、しばらくは雨漏りのないところで勉強させなしよと。そして考えましょうよとでもいいのではないですか。無茶ないい方だけれども。ということは27年にこだわらなくてもいいと。だけどもこだわらなかったら白小困るわけだけだから、そこにはこだわらなければならないと思います、27年には白小には白小子共何とかしてやりなさいと。今使えるところだって、雨漏りのしないところだってあるのでしょうから。それに若干足りない部分つけ足して雨漏りのしないことで、何とか過ごせるようにしてあげなさいよといいたいのです。

○委員長（小西秀延君）　吉田委員。

○委員（吉田和子君）　何かわからなくなってきました、いろいろ話聞いていると。私はもちろん今回の教育委員会は３校統合するといってきているわけだから複式学級のメリット、デメリットをはっきり出したのだと思うのです。だからこういう議論なっていると思うのです。では将来的に社台小学校がこの複式でやっていける状況にあるかどうかということも考えなければらないと思うのですよ。そのときになってから、では一緒にしましょうということには私はならないと、社台小はいやだというふうにいっているわけですから、だからこれからでは時間おいてやりましょう、それまで白小何とかいろんな方法でやって。30年、32年にやる。その頃の社台小学校が一緒に統合する。だから今回の先程の前に18年出したのもずっと見てきているのですけど、行政改革推進委員会から各地域に１校。それが18年の中で再度確認されて、このときもまだ各地域に１校ということはいっています。私は時代の流れ、時の流れというのがあって今回は将来的な社台小学校のメリット、デメリットそれは否定するのではないですよ。あると思うのです、それぞれ。今やっていろんな議論されるけど5年10年後にではどうなのかといったときに、もっともっとそれこそ大きくしなくてはならないのかもしれない。統合しなけれはならないのかもしれないのですけど、今出されている課題はまず３校の統合ですよね。だからそのときそのときに理由づけになると思うのですよ。よく今回も財政厳しいといわれて、なぜ財政が厳しくなったのかと議論があったときに誰の責任だという話があるでしょう。そのときにはそのときの課題を見つけて、それで議会決めて最高責任である議会でも賛否をとって決めたのだと、そういう話がちょっと答弁の中にありましたけれど、私は時の流れの中で私も最終的に絶対抜けないのでないですよ。各地域１校というのは抜けていないし社台に私は学校あるべきだと思っているのです。ただ今のメリット、デメリットの議論をすると親の中にはそのことに不安を抱いている親もいるということなのです。複式で本当に学力的に十分なのか。中学校、高校行ったときにきちんとできるのかという、そういった心配する親もいるのですよ。だからメリット、デメリットももちろん大事なのですけども、今この学校の状態をどういうふうにしていくのかというのは、私はこの委員会で議論しなければならないのかなというふうにちょっと思っているのです。教育の議論なっていくとそれぞれの考えがあるので私は１つにはなれないというか、結論出せないと思って聞いていたのですよ。だってそれぞれの子供育ててきた、まして先生の経験者だとか教育委員会の経験の職員いたわけですから、それぞれのいろんな思いがあると思うのですよ。私たちも子供を育ててきた親の感覚であるのですよ。だから社台の人がいういじめも何もない仲がよく、小さいときからずっと知っていて、それは本当に教育なのですかと私は反対に思うのですよ。いじめがあったり苦しいことがあって私は子供は成長できると思うのですよ。温かい

こういう中にいてよかったっていえるのか、広い中に入り込んでいろんなことにぶつかって子供って成長していくのではないかと。それだって１つの方法だと思っているのです。前にちょっと私の子供の同級生のときにあったのですけど、小さい学校から大きい学校行ったときについていけなくて悩んで自分で命を落とした子供もいるのですよ。そういったことも考えると、それはその子が弱かったと思えばそれまでだと思うのですけど、その子供の命の中に培ってきたものというのは何かのときに出てくると私は思うのです。だから小さい学校がだめだというのではないですよ。それはそれでいいのですけど、こういう議論になったときにどこかに接点を持っていかなかったら、こういうふうに全部議論していたら、何かまとまらないなと。だから妥協しなければならないのかなと思いながらずっと今思っていいたのですけど。小規模校社台は社台の学校すばらしいと何回も行っていますから、見ていますからいいというのはすごくわかっているし、ただ今の統合やるときに本当にこういう議論をずっとやっていったら、どこへ行くのかなという思いで聞いていたのですけど。ここで出す必要はないのかなと。応諾書で社台がいいですと押してしまったら終わりなわけでしょ。だからどういう議論になるのかなと私もちょっと。ただ条件的な整備だとか教育委員会が示す示し方のきちんとしてないところだとか、そういったところをきちんと所管として意見をいっていくべきなのかなと教育議論してしまっても話まとまらないのかなと。何かこんがらがってきて理想があるから私は１校１校だと思っているのですよ、ずっと。それは絶対どんな形であっても残してもらえたらありがたいなと思っています。ただその議論は私たちがすべきなのか、もちろんすべきなのだろうけど、教育の理念、理想をみんなそれぞれいっていたらできない。

○委員長（小西秀延君）　斎藤委員。

○委員（斎藤征信君）　社台が30年まで待ってほしいしといったのは何だと思う。しばらくはもつからということなのです。全部どちらに転がっても命取りになるわけではないのです。何がいいか、どれが理想かという問題なのです。そうすると今社台の希望からいうと、30年まで延ばしてその間にももっと考えて、30年なったらもう社台はだめよという状況が来ることははっきりしているのです。それまでの間に決めてもいいわけです。ただ議員として今いろいろ話して理想はあるよ、だけど現実は妥協しなければならないかなといったのは、それは間違いだと思うのです。やっぱり理由は理想を追求してこうあるべきだと。何でこういうふうにならないのだという、はっきり言うべきだと思うのですよ。仕方ないなと考えるのは行政なのです、そこら辺の区分けきちんとしないと、一緒になって私たちも同調してしまったらそちらへ流れるしかないのです。それだったら何にもよくならない。今こういう状況に置かれて苦しいのだけれども、いつでも理想は話しませんと、何で各地に１つずつ置けないのですかという論議をしなければならないと思うのですよ。それが行政を動かし、行政が最良の手が打てる材料ができるのではないか。そこのところやはり議員が忘れてはだめだなとていう気がします。

○委員長（小西秀延君）　吉田委員。

○委員（吉田和子君）　私は理想をなくすなとか、町民のこと思わないなんて考えていません。町民が１番大事だと私思って、議員はそういうふうな形で議員をやっている、代弁者ですから。だからいろんな親がいるということなのですよ。今いるから大丈夫だからいいのだということではなく

て30年まで持ちますかと、私はそれでもいいと思うのですよ。それとも私は社台は別にしなさいでもいいと思うのですよ、議会としてやるのであれば。今応諾書で社台のこの間ＰＴＡの役員はＰＴＡの中では応諾書に判を押しますといいましたでしょう。考え方は今そうですといっています。それをそういう思いでいる親たちもいる中で議会は社台は別にしましょうと、理想的な教育はできないと、そういうことでいって通しているのであれば私は通したいと思います自分の中では。ただ社台小学校を別にできるのかどうか、その辺私教育委員会で確認しませんでしたから、それは別にして２校だけの統合というのはやるのかどうか。社台の希望は２校一緒にして後からはいやだということであれば、社台はずっと永久に１校として地域に１つの学校としてやっていけるという、きちんとした応援もしていかなければいけないという感じするのですよ。そういったことが今後続けられるのかどうか。将来的にわたってどうなのかということも私たちやはり議員だから、今ではなくて将来の学校の形はどうあるべきなのかということも面に考えなければいけないのかなと。今はいろんな思いがあるのだけれども、将来ずっと持続できるのかということもちょっと検討をしてみる必要はないのかなとちょっと思うのです。理想論もちろん社台にあってほしいと思っていますから、保育所をなくしたときだって絶対なくすべきだと思っていませんでしたから、今も小規模でいいということなら社台につくりなさいという考えているほうですから、だから絶対なくなっていいなんて思っていませんから、それだけいっておきたいと思います。

○委員長（小西秀延君）　山田副委員長。

○副委員長（山田和子君）　山田です。私もここにで教育論とか指導手法について論じても一致しないと思っています。議員として白老町の教育がどうあるべきかという観点から人口の推計を見ても将来的には全町で１校にならざるを得ない状況も見えてきているところなので、さまざまな教育論はあると思うのですけれども、財政のことも考えるとそれなりの方向性は見えてくると思うので、そういった観点から議論を進めていけばいいかなと思っています。

○委員長（小西秀延君）　前田委員。

○委員（前田博之君）　今山田委員も話したけども、ただ財政の問題とか白小が今ああいう状況なので急がなければだめだということは、これは教育とはかけはなして議論しなければ、さっきの斎藤さんお話しするときにいってしまうのですよ。我々はとすればよりよい統合とか社台小残るとかということを今議論より、よりよい教育環境がどうあるべきか。インフラも当然です。だけどインフラだって緑小の今まで14年になったのに、なぜ今までなげておいたのですかと、何もしないで。そういう部分が跳ね返ってくるのです。あそこにいってしまうとそういう話になっってしまうから、我々はいかに教育的に統合するにしても白老町の教育を独自にどういうときがあるかと、教育のために。そういう提案をしていかないと、僕は意味がないと思う。僕も先程言おうと思ったけど、斎藤委員が言ったてましたけど、少人数学級だってこの３校の保護者から聞いても全然出てこないのですよ、小人数はいいよというけど。どういう教育をしてほしいのかと統合したときに。そうすると今２年生までは35人学級で40人です。ただ41人になれば２つになるから20人になるけど、40人の場合はずっと１学級でいくのです。これのは不幸です。この場合に白老町としては３校統合する。あるいは２校統合する。そのかわりこういう条件になったときは、町独自にティーム・ティーチン

グをつけて小人数教育、40人であってもティーム・ティーチングをつけてきめ細かな教育しますよと、そういう条件が整備されなければいけないのですよ。それが何にもないということです。それはやっぱり議会としてもこの委員会としてもそういうことをちゃんとある程度意見書をまとめるときに、そういうこともちゃんと付記しておかないと委員会の資質は何だということが疑われると思います。僕はそういうことをちゃんと。だから財政とかそういう問題はそれは大人の行政側の話であって、我々とすればどういった教育がいいのだろうということをやはり議論して、それを委員会の方向に整理をしておかないと、財政でいっても何も言えないですよ、できませんから。そういうことです。

○委員長（小西秀延君）　山副田委員長。

○副委員長（山田和子君）　私ももちろん白老町の教育がどうあるべきかのところに含めているのはティーム・ティーチングであるとか、加配の申請であるとかそういうことは十分理解して申し上げております。

○委員長（小西秀延君）　ちょっと１回整理させてもらっていいですか。今回統廃合が議題の主題になっています。白老町の教育問題となるとこれは全町に普及します、ティーム・ティーチングの問題や加配の問題また41人になれば分かれるというのは普段からの教育論だと思うのですね。ちょっと議題を少し整理しながら進めればまた効果的かなと思いますので、大分議論も熱くなってきましたので一旦ここで休憩いたします。

休憩　１１時　３分

再開　１１時１６分

○委員長（小西秀延君）　休憩を閉じて会議を再開いたします。

引き続きになりますが適正配置計画（案）に対する自由討議、意見も大分出ておりますが、そろそろ討論をもう少ししたいと思いますので、意見のまとめでご発言のある方はどうぞ。前田委員。

○委員（前田博之君）　私は最悪の例えでお話しますし、ただ過去に各地域で統合こういうものも出てきてです応諾書はあくまでも賛成多数というのか、そういう雰囲気で出すのですけども、逆に応諾書出したって社台あたりでも半数は複式学級認めて少人数がいいよといっているけども、そこに行ったときにある程度先ほどいった少人数とか、いわゆる教育の観点から私たちは統合できませんよと反対ですよと。そこに子供たちを通学させませんよというぐらいの姿勢になったときに大変困る可能性はある。よそではそういうこといっぱい出ていますから。そういうことも含んで私やはり条件整備というのか、それにちゃんと不信感を持たないような形で地域の人が十分に説得して納得できるような部分を教育委員会が汗をかくべきだと私は思います。そういうことまで最悪の場合は想定をする可能性は行政として僕はあるべきだと思います。

○委員長（小西秀延君）　斎藤委員。

○委員（斎藤征信君）　今の話の中でＰＴＡとの話でその話はそういう条件は応諾書をもらってからって、みんなそういうふうに受け取っているのですよ。教育委員会の説明がどういう説明だったかわからないけども、応諾書が先にあってそのあとの条件は一緒になってから全部できるのです

よ。もちろんそうだと思うのです。応諾書があれば条件整備というのは何ぼでもできるだろうと。だけども何でそういう議論になったのかと。せっかくここでやるよと決めたのであれば、なった後のことまで話をしてみんなに納得させて応諾書をそれからいただくというのが筋だろうと。その辺の教育委員会の歩き方というのがすごく足りなかったというか説明不足というか。そこら辺の住民が求めているものに手が届いていないのではないかというところにすごく大きな問題を感じるのですよ。ですからそれは統合後の条件整備の話だなと思っても、それをもう統合を前提にしてしゃべるのであれば、その話も全部解決してあげなければならなかったはず。そういうふうにになぜ持っていけなかったのか。そこら辺は教育委員会の責任はあるなという感じは特にしたのです。だから今これからまたその説明するチャンスというのは何ぼでもあるのだろうと思います。本当に私たち今考えてみて白小の事を考えたら、もう本当に進めなければどうにもならないのだろうなという気はしているのです。だとすれば本気で教育委員会もその気になって統合を前提にしてそういう説明というのはきちとすべきだだろうと私はそう思います。それを求めたいと思います。先程話でていました自分のうちの距離は何キロある、それをどうやって安全を守るのだ。ではこっちがスクールバスだったら、こっちは反対側の同じ距離の子供はどうするのだ。その話しというのは必ず出る。その話もではこうしましょうかという話をしていなければならないはずです。それは応諾書の後です何という話にはならないはずです。だから松田謙吾議員からも中学校のスクールバスにあたって、北吉原の子供たちをどうしてスクールバス乗せてもらえないのだろうかと。それだけの距離があるからそういう言葉が出てくるわけでしょう。そういうところの整備というのはやはりすごく住民にとっては大事な話ではないのかなという気はするのです。

○委員長（小西秀延君）　ほかご意見ございますか。山田副委員長。

○副委員長（山田和子君）　山田です。中学校のときの手法と今回の手法は違うというふうに認識しています。今回はたたき台として、この案が教育委員会から出されていますので、これはコンクリートされたものではないので各校の代表と地域の代表によって形成される準備委員会の中で十分に議論を尽くされて、統合の時期についてはそれもコンクリートされたものではないので、十分に住民の方の理解を得てから統合するべきだと私も思っております。その際に白老町の教育がどうあるべきかという観点から、そのティーム・ティーチングですとか教員の加配については、十分に説明して保護者の方の教育に対する不安の解消もするべきだと思いますし、当然ながら通学路に関する安心安全の確保を約束するべきだと思っていますので、そういったことを私は気をつけていただければ今回の案はいいのではないかなと思っています。

○委員（斎藤征信君）　加配という言葉を使っているのだけども、加配をあてにしてそういう条件整備をするのだということは、それはどうなのですか。保証されるものですか。加配とはどんなふうに使っていますか。

○委員長（小西秀延君）　山田副委員長。

○副委員長（山田和子君）　山田です。専門家ではないので間違っているかもしれませんけど、一定の定数よりもプラスされて教員が配属されるという意味で統合のときはやはり社台小学校の先生も緑小に行ったりすることが必要だと思いますので、白小にいた先生も緑小に行ったりすること

が多分必要なってくると思うので、そういった観点からの加配というか定数よりも多く先生多く配置していただけるように胆振教育局と道にお願いするという意味で言っています。

○委員長（小西秀延君）　斎藤委員。

○委員（斎藤征信君）　それは無理なのです。確かに統合する学校からも先生が行くということはこれは条件として望ましいことなのだけども、定数というのは子供の数によって決まるのですよ。定数が決まったその枠の中での操作なのですよ。ある目的があって、こういう特殊な子供たちを扱うから加配してあげますというのは、これ道の枠の中でそれに当てはまった部分だけが加配なのです。道負担の加配というのがあるのだけども、それだっていつでも１人欲しいから来てくれといって加配になるものではないのです。ですから、加配をこれから要求しますというのは、国に対して補助金返さなくてもいいですかという交渉と同じなのです。可能性というのは極めて薄いです。ですからそういう加配があるから、加配をしていただくようにするからという論議は、これはしてはいけないのだろうと思います。

○委員長（小西秀延君）　山田副委員長。

○副委員長（山田和子君）　前回の委員会のときに教育長も加配の申請をしていくという発言をされていたので、それを信じたいなと思っているのですけど。いかがでしょうか。

○委員長（小西秀延君）　斎藤委員。

○委員（斎藤征信君）　各町村先生方が足りないものだから、小人数指導をするために先生方のほしいから、1人でも多く何かの条件をつけてい加配してもらうということに躍起になるのですよ。だからそれはそれで権利があるからそれでいいのだけども、道としてはある一定の道の方針に基づいて、それに当てはまってなかったら加配にならないから、いつでも要求すれば加配になるかということにはならないよといっただけです。

○委員長（小西秀延君）　なるかならないかはこちらには決定権がないのでここで議論をしてもちょっと無理があると思いますので、その議題は置いておきたいと思います。ほかにはございますか。

　では最後に私から一言意見を述べさせてもらいますが、これまで議論の中でいろんなお話も出てきました。14年でしたか、各地域に１つという、その印象は皆さんの頭にも強く残っていますし、現実的に残せるのであれば、それがベストのかなというご意見も皆さんから大変いただきました。私も残せるのであれば、それが理想の１つなのかなというふうに思っております。ただ、人工的なもの、この少子化の中で子供たちが少なくなっている。その中での教育を担保するという責任というのは町側にもあるというふうに感じて、それはもう当然のことだと思います。今後社台が新しく各地域に１つということになれば社台が新しく加わったという形になりますが、今後33年ぐらいまでは複式が担保できるということでございますが、それ以降になれば社台もその体制を維持するというのは難しいくなるのはもう目に見えてきております。それをやはり考慮すべきだと私は今現時点でも考えております。今回社台を統合せずに２校だけで統合という形になりますと、もちろん後々社台のＰＴＡの役員の方たちもおっしゃっていましたが、その後の統合はやはりされにくくなるという条件にもなっていきます。であれば今回いろいろな諸条件、統合には間に合わない諸条件も出てきているように見受けられます。ただ、それがほかの条件を持って通学路の安全を担保する

条件、指導員をつければ皆さんがよろしようといえるような条件、そのような条件が整えばＰＴＡの方が納得したという合意をもって統合を進めるべきだというふうに考えます。極論を言えば、先ほど斎藤委員がおっしゃられましたとおり、白小プレハブで残していけるかもしれません。社台小も33年まで残せるかもしれません。緑小はそのまま33年までいけるかもしれません。ただそれをしてしまうと今後またその後に同じ議論を始めなければならないのはもう必至でございます。ここできちんは子供たちの将来を描いてあげるのが私たちも責任があることだと思っているのが私の意見でございます。それで今回皆さんの意見が整うのであれば、極力教育委員会にもその合意を求める努力をしていただいて、今回の統合案進めるべきと考えてございます。以上です。

それでは論議も大変長時間にわたってへ行ってまいりましたが、本日の２番目の委員会報告のまとめに移らせていただきたいと思います。議論を経た上でまとめにぜひ書いていただきたいというような文、意見がございましたら各委員からの発言を求めます。前田委員。

○委員（前田博之君）　３校の保護者の方とお話すると大半は統合について前向きな姿勢であるということは十分認識されました。ですのでこの時期を起点にして私も統廃合に向けて、教育委員会が汗をかくべきだと思っています。白小のことを考えればまずスピード感を持つべきであると。しかし前提とすれば社台小学校がここにも書いていますけども唐突対象になったと。そういうかなり不信感であり説明不足もありますので私も社台小学校合わせて３校が統合すれば一緒にやるべきだと思います。それで教育委員会がいっている27年という時期設定について棚上げしてまず各校の学習内容、教育内容、通学等々についての条件整備をちゃんと整理をした上で町民が保護者があれば地域の方がそれで理解したされた上で３校を統合をすべきだということでありますので、もう少し教育委員会は熱意と不信感払うこととスピード感を持って統合に向けてやるべきだと私は思います。

○委員長（小西秀延君）　吉田委員。

○委員（吉田和子君）　私は本当に教育委員会としては11日に応諾書をまず受け取って、その後地域それからＰＴＡの人達を加えて本当に準備それから不足すること、それから問題点をきちんと皆さんの意見を聞きながら進めていくという話をこの間しておりましたので、本当にその準備委員会のあり方、準備委員会がその学校のＰＴＡ父兄の方たちとしっかり連携をとって、ＰＴＡ出席率悪いわけですから半分以上の人は何も出ていないわけですから、そういった方々にもきちんと情報公開してきちんとした意見の集約ができるように準備委員会として努力していただきたいですし、この間申し上げましたけれどもその中に今後小学校へ入学する父兄、そういった方々も含めてもらいたいというお話ししましたら、それは考えていくといっていましたのでぜひ今後入学を控えている方たちも加えて、その準備会議室設置してやっていただきたいという思いがあります。今前田委員がほとんどをまとめて言いましたので、社台は別といったらまた意見をいおうと思ったのですけども、時期だけのこといっていましたので、やはり時期は早急にといっていましたので、27年が１つのめどといっていましたので、やはり私は白小学校のことを考えたら早く早急に、ただし社台小学校には本当にきちんしたの詳細な詳細なきとんとした説明と理解を求めて進めていくというふうに考えるべき。将来的な学校のあり方に考えたときには、そういう意見を出すべきだというふうに

考えております。

○委員長（小西秀延君）　本間委員。

○委員（本間広朗君）　今ほとんど皆さんがいわれたとおりなのですけど、応諾書がおそらく予定として11月中旬に出るとしたら、この委員会報告が12月だとしたら、もう応諾書はおそらく出されたことを仮定しまして、来年２月から準備委会が始まりますので、今言われたように社台小からのいろんな意見もお聞きしています、白小ももちろん校舎のことも含めていろいろ。まだまだ当然よく教育委員会とはお話してないので納得しないところもありますので、応諾書が例えば受け入れ提出されたとして、やはり教育長が準備委員会に入ったら２カ月度ぐらいの協議というかできませんよというお話していたので、今前田委員がいわれたように、27年度にこだわらないのならいいですけど、やはり27年度にこだわるとしたら、やはりこのスピード感というか、３校と議論していかないとだめだと思いますので、その辺本当にできるだけ皆さんの意見を聞いて、意見整理して全てが実現できるわけではないのですが、実現できる方向に教育委員会は努力していってほしいという意見です。

○委員長（小西秀延君）　斎藤委員。

○委員（斎藤征信君）　もう話が出つくしてそれ以上のいいようがないだろうなと思うのですが、まず住民が少子化で社台はもうこれ以上ちょっと大変だなという思いと、だから仕方がないという雰囲気と、それから白小は老朽化でもうこれ以上はだめだという、そういうあきらめの中でことが進んでいるということで、それが先ほど不信感という言葉があったのだけども、やはりそれがどうせ決まったことは進むのだろうという、そういうものにつながっているというふうに私は考える。仕方ないなとこういうことなのです。だけども基本の１つは決めるのは住民だということです。だからそのことだけはきちんと押さえておいてほしい。だからそうなって考えると今までの段階でいうと27年はもっと柔軟に考えるべき。棚上げするという先ほどいいましたけどもこれと柔軟に考えていいのではないかと。応諾書を出す前に応諾書を出す手続をもっと丁寧にきちんとやりなさいと。それに時間かけなさいと。日にちを決めてばたばたとことを急いでしまうのではなくて、白小だって今まで何年もほって置いて、いまだ頑張ってやっているのだから、まだもう少し頑張れますよ、悪くいうと。だからその間に手続をもっと丁寧にやって、そしてみんなが納得した上で方向づけをするというふうにしかならないだろうというふうに思います。その手続があまりにも雑なような気がします。

○委員長（小西秀延君）　前田委員どうぞ。

○委員（前田博之君）　基本的には変わりませんけど、ただ私も吉田委員も多分斎藤委員もそうだと思いますけど、あくまでも地域に１校、学校を残すという精神はかえませんので、それはそういう考え方はあるよと。観点立った上での考えですので委員長報告をするときに地域に学校はあるべきだという意見もあったということは付記した上で今出た意見を整理してほしいなとこう思っています。いかがですか。

○委員（斎藤征信君）　それにつけ足します。私はこの１番最初の方針が出たときから、鉄北と鉄南は地域が別だと思っていますから。ここも１つずつはあるべきだと。人数の関係からいったって、

これが同じ字白老だから１つなんていうのはこれで考え違いであって、私こちらにいて、分かれていたときからいるわけですから、今度はくっつくところまで一緒にいなければならないのかなと思うけど。地域は１つの中に字白老も地域だよと。鉄南、鉄北の地域だよという思いがすごくありますから。だからぜひ地域に１つは強くいっておいてください。

○委員長（小西秀延君）　ちょっと今のところを整理させてもいますが、地域に１つはいろんな方も意見出ていましたので、それはもう書こうと思うので私いいと思うのですが、鉄南、鉄北までは。前田委員。

○委員（前田博之君）　白老は１つなのですよ。それを余り強調してしまうと、その変な地域エゴが浮いてしまうのです。やはり議員ですから字白老全体としてはどう底上げするかという、教育を上げるかということを議論していただきたいと思います。

○委員長（小西秀延君）　吉田委員。

○委員（吉田和子君）　14年も18年も地域にこうということで出されていて、ずっとそれは私たちも承認してきていましたので、これはいずれ各地域１校だろうというふうにはの思っていましたので今回社台が出てきたのでちょっとびっくりしたということだったのですけど、その１校という基本的なものはずっといわれてきて、図書館つくるいろいろなことありましたけど、そういうことは基本的において私はいいと思います。私は鉄南、鉄北に何か白老を２分するような言い方はやはりの議会としてはしないほうがいいというふうに思います。それともう1点は、統廃合、適正配置するしないは別として、通学路の心配一番しています。この歩道橋というのは前から言われていることで、これは通学すぐきちんと開始できることではないので、11月に予算要望しなければならないといっていましたけれども、本当に親の希望に沿った、もしかしたら自転車通学も許可されるかもしれないのです。ですから自転車でも通れるような歩道橋のあり方と、ＪＲの協議これから問題だといっていましたけれども、その辺はほかよりも何よりも早急に本当に早急に結論を出さないと親いつまでもこのことを心配しなければいけないわけですから、きちんと早急にＪＲとの協議とそれから歩道橋在り様を明確にすべきだということをつけ加えていただきたいというふうに思います。ポロトの踏切のところもそういう希望的出ていました。これは委員会としてポロトの踏み切りのところも自転車に乗って子供が安心して通学ができるような場所にしてもらいたいということもつけ加えたほうがいいというふうに思うのですけども。

○委員長（小西秀延君）　今吉田委員から出ました通学路、歩道橋の自転車通学のあり方も兼ねて、そしてＪＲとの協議を急いでポロトからの通学、その辺もまとめの中には書かせていただきたいと思います。ただ斉藤委員からおっしゃられたちょっと今議論を鉄北、鉄南というわけ方はちょっと議論を生むところなので、そこは今回は差し控えさせていただいて、地域に１つということで委員会としてはまとめさせていただこうと思うのですが、よろしいですか。その辺はご納得をいただいて。斎藤委員。

○委員（斎藤征信君）　そういわれるとちょっと辛いのだけど、私はこの１番最初の案が出たときから何で鉄南、鉄北が地域は１つなのだと。別だろうというふうに、質が違うとか何とかの問題ではないけど、基本からいってそう考えるべきだというふうにはずっと思ってきたからそれは絶対譲

れないのだけども、この場に及んでそれいってもしょうがないから。それは引っ込めます。ただ今の踏切のことに関していえば、私も歩きながらやはり向こうから来る子供はポロトを歩く。ポロトの踏み切り自転車で歩く、それからこっちの子供は跨線橋を自転車おして、したは渡れませんから。あれを自転車を押し上げられるような形にまでしなければ通学路は安全性は守れないと。それから向こうの東の踏み切りもそうです。駅の跨線橋は自転車を押して上がれるようになっていますよね。こちらが側の役場内前はなっていませんね。それから東側のあそこの踏切も細いですね。そうすると自転車を押して歩ける状態ではない。この辺は最大の条件だと思っています。だからそこに早く手をつけて頑張るようにしてほしいなとそれを伝えておきます。

○委員長（小西秀延君）　前田委員どうぞ。

○委員（前田博之君）　細かい条件になって通学路の話ししていますけども、報告に固有名詞出るのかわかりませんけど、そこまでいくのだったら高砂だってそうなのです。向こうの踏み切り、マルゼンの前の踏み切り。あくまでも固有名詞入れないで全体の中の通学の利便性を考えるべきだということで整理しておかないと、固有名詞を挙げてしまうと、全町的なそういう。

○委員長（小西秀延君）　斎藤委員どうぞ。

○委員（斎藤征信君）　役場は２カ所か３カ所固定します。今からそういう固定をするのではなくて、全体的にそういうどこからでも通れるようなことを考えて、最終的には学校が通学路を決めることではありますから、だから固有名詞を挙げないというのは確かにそのとおりかもしれません。

○委員長（小西秀延君）　通学路もこれから決まっていくででしょうけど、全体的に通学路とさせていただきます。そのほうがどこここといいますと地域のやはり地域のエゴも先に入ってきますので、そのような扱いをさせていただきます。どうぞ。

○委員（前田博之君）　物理的な部分でインフラ部分はわかりましたけども、教育、町の独自の教育、指導的な部分でいわせていただくと、定員40人になりますけども小人数学級、当初スタートしたときには小人数学級を目指して国や道の加配ではなくて、町独自のそういう対策を私はすべきだと思います。それとことばの教室と支援学級、これらの足切りは絶対しないで、十分な要望に答えるような一面とすれば、福祉というのかそういう子供たちの対応のできるソフト、ハードの面でしていただきたいということだけは付記しておいていただきたいと思います。特別支援学級は管内でも白老がある程度優先してやってきて評価されているところなのです。ですからぜひそういう部分は予算とか云々ではなくて、そういう人がたの教育を重点的にも配慮していただきたいということだけは書いておいてほしいなと思います。ということは委員会としてもそういう部分で議論されたのかということが残っていなければいけないと思いますので、そういうことでもしほかの委員さんもあれば、そういうことで付記しておいたほうがいいと思います。

○委員長（小西秀延君）　ちょっとそこだけ確認させていおいてください。ことばの教室、支援学級、こちらのほうはきちんと対応を条件にあうように考えるべきというのは、ここは僕はいい思うのですが、小人数学級も町単独で今回委員会として上げるべきかどうかというのは、ほかの委員さんからもちょっとご意見をいただきたい思います。吉田委員。

○委員（吉田和子君）　特別学級等についてはことばの教室は緑小に持っていくという話していま

した。特別学級については人数がこれだけで将来的にはまだわからないということで。ただちんとした教師の担当とかはきちんとしていくということは今いっていましたので、教育委員会にいっていないことを入れるわけにはいかないので、それは前回いっていますので、きちんと特別学級に対する配慮をきちんとするということは入れていただきたいと思います。それと今回の適正配置の案の中でこういうふうにいっているのです、適正規模の考え方として教育委員会は、児童生徒が人間関係を固定化を防ぐことができるとともに児童生徒の活力の増進と学校の活性化を図ることができる学校強であることいっているのですよ。だから統廃合しても１つのクラスがえができないのであれば意味がないということと私は思いますので、そういうことをきちんと上げている以上は考えていただきたいというふうに思います。

○委員長（小西秀延君）　クラスがえをできるようにするという。今クラスがえというと通常どおり私の考えでいけば40人だと思うのです。前田さんがいっているのはそこからもっと踏み込んで少人数学級に町単独でやるべきだというのは、これ私は別問題だと思うのですよ。その辺のご意見ございます方。　前田委員。

○委員（前田博之君）　吉田委員各の話はわかります。ただ教育委員会は資料から見れば統合の時点では40人学級でも２学級できるという観点で資料つくっていますから。これは統合したとして２、３年して人数割ったときにはどうですかということ。永久にするということではなくても統廃合した数年間は、もしそういう学級オーバーするときはそういう少人数学級の今いったようにクラスができるような体制をつくるべきでないかということです。

○委員長（小西秀延君）　私が考えるのにそこまでいくと普段の教育論にも突っ込んでくるところだと思うのですよ。ただそこまで将来を考えて今回の委員会でこれを付議すべきかどうかだと思うのですね。斎藤委員。

○委員（斎藤征信君）　先ほども言ったように目標の中にきちんそれが書かれているわけですよ。そのためにそれが最大の理由なっているわけです。複式の解消とそれから複数クラスの実現ということが合併の１番の目標になっているわけです。それがあるから今そのことを指摘したのだけども、それやると先ほどもいったけども、今の合併はいいです。今の合併は緑小と白小と社台と合わせると２クラスずつこれからずっとしばらくは続くだろう。それが終わったら今度は向こうへ行くわけでしょう。萩野方面の適正に移るわけでしょう。そこは１つしからならないのですどう計算しても。だから1クラスの定数がどんと減れば２クラスにはなるけども30数人、40人近い数で１クラスにしかならないのです。だとすれば、それは目標に外れるから、こちらの字白老の学校と合併するということになってしまうのですよ。そんなことがあっていいかということを先程いったのですよ。だからこの目標の立て方というのは変ではないかと。だから前田さんのいったことはちょっとかなり思い切ったことだけども、町で定数をいじるというのは町で先生を抱えなきければならないという、それはちょっとどう考えたって道でさえ無理。町は無理かなと思う。国に対する要求ということで25人学級、30人以下学級という要求っていうことでは、これは掲げる必要があるのですよ。だけど今現実的かどうかはわからないけど、ということで目標に矛盾があるのです。

○委員長（小西秀延君）　暫時休憩いたします。

休憩　午前１１時５５分

再開　午後１２時　３分

○委員長（小西秀延君）　休憩を閉じて会議を再開いたします。

休憩中またそれ以前の議論を少しここでまとめさしていただきますが、前田委員から少人数学級も町単独でこれを考えるべきだと報告に付議してくださいというご意見がありました。そのほかのことばの教室または支援学級を要望に答えるようにしていただきたいというのは委員会の中で、コンセンスがとれておりますので付議させていただきますが、小人数学級となるなりますと単独でこれは決めて教員の給与も考えていかなければならないというようなこともございます。ただ、そこまで今回、一般の教育論に踏み込むのはいかがなのかというご意見も出ておりますので今回の３校の統合も、将来的には目標にありますクラスがえができなくなる可能性が出てくる可能性が大でございます。そのときにこの目標果たせなくなるというようなことも考えられますので、小人数学級または小人数指導を町としても今後検討していくべきと一文付議させていただくという意向で進めさせていただきたいと思いますが、よろしいでしょうか。斎藤委員。

○委員（斎藤征信君）　もう少し正確にいわなければならないかと思うのですけども、小人数学級で定数が減った場合には分離しやすくなる、クラスがふえやすくなるわけです。そのことは町でやろうと思っても、今話があったように人件費の問題やら何やらで町ではできないのです、単独ではなかなか。これは国の問題なのですよ。だから国へのこれは要望だと思うのですよ。小人数学級をつくるため定数削減をすべきということは、これは国に対していうべきことなのです。だからその要望がまず１つ。それから町でできることというのは、その今の定数の中でいろいろグループ分けをして、少ない人数で指導する小人数指導のことなのですよ。その小人数指導、小さいグループに分けて、それにそれぞれの目が届くようにするためには、複数を配置するということで、そういうものは道に要求して加配をしてもらうと。合併したときに、学力格差があるから、学力格差何かを埋めるために、そういう指導、少人数するために加配を要求する。あるいは町が単独で抱える、そういうことも検討すべきであるということになると思うのです。おわかりでしょうか。

○委員長（小西秀延君）　暫時休憩いたします。

休憩　午前１１時　７分

再開　午前１２時１１分

○委員長（小西秀延君）　休憩を閉じて会議を再開いたします。

斎藤委員より小人数学級また小人数指導の個別の議論をすべきであるというご意見も出ましたが、今回は、この白老町の適正配置計画にあるクラスがえという適正規模の考え方がございますので、今後統合校もクラスがえができなくなる可能性があると。それを踏まえ小人数指導、小人数学級を国、道これは別にいたしまして白老町としてどう対処していくか検討をすべきであるというところにとどめ、明記させていただきたいと思いますが、よろしいでしょうか。

〔「はい」という者あり〕

○委員長（小西秀延君）　ほかに特に記載すべき事項等をお持ちの委員の方いらっしゃいますか。前田委員。

○委員（前田博之君）　教育委員会自身が住民の立場に立って汗をかくべきだと思うし、スピード感を持ってやるということは、これは過去の今までの例から見るとちょっと遅過ぎるし、町民側に沿った対応はされてないと思いますので、そういう部分はもっと教育委員会が統合に向けて自ら先頭に立って汗をかくべきだ思います。もし皆さんの意見があればそういうことをぜひまとめておいてほしいなと思います。

○委員長（小西秀延君）　そのような文言は随所に出てきておりましたので、私のほうでそういう意向をまとめさせていただきたいと思います。ほかございますか。ないようであれば委員会報告のまとめ方でございますが、ただいま自由討議にあったところからも抜粋をさせていただきますし、委員会報告のまとめで皆さんがこれは明記してほしいというところは必ず載せるようにいたします。それを委員長、副委員長でまとめて皆さんに一度ご一読をいただき、承諾を得て議会のほうに報告をさしていただくという流れにしたいと思いますが、これにご異議ありますでしょうか。

〔「異議なし」という者あり〕

○委員長（小西秀延君）　異議なしと認めます。それではそのように手配をさせていただきますので、よろしくお願いします。その他ほかに特に申し述べるておきたいとこ、全体とおしてなければ、ありませんね。

〔「なし」という者あり〕

◎閉会の宣告

○委員長（小西秀延君）　以上をもちまして、総務文教常任委員会を閉会させていただきます。

（午前１２時１５分）